

第四章 薫の物語 中君に同情しながら恋慕の情高まる

[第一段 薫、匂宮の結婚につけわが身を顧みる]

中納言殿の*御前の中に(中納言殿の御車の先払い従者の中に)、*なまおぼえあざやかならぬや(同じ従者なのに主側で褒美にありつけなかった所為か)、暗き紛れに立ちまじりたりけむ(良い思いもせずに目立たないまま立ち働いた者らしいが)、帰りてうち嘆きて(三条宮邸に帰り着くと嘆息して)、 *「御前」は「ごぜん」と読みがある。この「ごぜん」は大辞泉にく《「御前駆(ごぜんく)」の略》「前駆」を敬ってという語。みさきおい。みさきばらい。>とある意味するらしい。 *「なまおぼえあざやかならぬや」の「なま」はくなまじっか=似たようなものの、一方はそれに反して>で、「それ」とは上文の「召次、舎人などの中には、乱りがはしきまでいかめしくなむありける」とあったもの、との対比だろう。

「わが殿の(うちの殿様は)、などかおいらかに(どうして普通に縁談を受けて)、この殿の御婿にうちならせたまふまじき(大臣殿の御婿さんにお成り為さることがなかったんだろう)。あぢきなき御独り住みなりや(何も良い事が無い御一人暮らしというもんだ)」

と、中門のもとにてつぶやきけるを聞きつけたまひて(と、中門の所でつぶやいていたのを聞きつけなさって)、をかしとなむ思しける(薫君は可笑しくお思いになりました)。夜の更けてねぶたきに(夜更けの眠たさの中で)、かのもてかしづかれつる人びとは、心地よげに酔ひ乱れて寄り臥しぬらむかしと(客側として接待を受ける婿宮付きの従者たちは、気持ち良さそうに酔い潰れて寝入ったらしいと)、うらやましきなめりかし(その従者は羨ましかったのだろう)。

君は、入りて臥したまひて(薫君は部屋に入って横になりなされると)、

「はしたなげなるわざかな(祝言の餅祝ってというのは、極まり悪いもんだな)。ことことしげなるさましたる親の出であて(家の体面を事改めて示すべく勿体ぶった親が居る席で)、離れぬなからひなれど(親しき仲にも礼儀ありで)、これかれ(改めて誰が誰だと関係を確認し合うべく)、火明くかかげて(ひあかくかかげて、わざわざ火の近くで顔を明るく見せ合って)、勧めきこゆる盃などを(酒をお注ぎ申す記念の盃を)、いとめやすくもてなしたまふめりつるかな(宮はうまく受け流していらっしやっただ)」

と、宮の御ありさまを、めやすく思ひ出でたてまつりたまふ(と、婿宮の御様子を世慣れた無難さだと思ひ出し申し上げなさいます)。

「げに、我にても(もし私のことだとしても)、よしと思ふ女子持たらましかば(見所があると思える娘を持っていたならば)、この宮をおきたてまつりて(この宮を他に置き申しては)、内裏にだにえ参らせざらまし(入内さえ参らせるまい)」と思ふに(と思うものだが)、「誰れも誰れも、宮にたてまつらむと心ざしたまへる女は(誰でも宮にお仕え申し上げようと希望なさる高家の女子は)、*なほ源中納言にこそと(さもなくば源中納言に仕えたいと)、とりどりに言ひならふなるこそ(口々に言っているようなのは)、わがおぼえの口惜しくはあらぬなめりな(私の評判も捨てたものではないようだ)。さるは(しかし私は匂宮とは違って)、いとあまり世づかず(あまり色事に打ち興じず)、*古めきたるものを(年寄り臭いの)」など、心おごりせらる(などと優越感に

浸ります)。 *「なほ」はくさらに、いっそう>と事柄を強調する副詞語用もあるが、論旨補完の為に文を追加する際のくただし、あるいは>という別視点の提示を成す副詞語用も有り、此处では後者だろう。 *「ふるめく」は「今めく(当世風だ)」に対してはく古風だ>という言い方でもありそうだが、此处では「世づかず(結婚志向が無い)」と同類の概念を示していそうなので、「古し」の<年寄りだ→地味だ>くらいの語感なのだろう。確かに、薫君は出生事情もあって厭世観も強いが、しかし一方では洒落者で十分健康な性欲を持っている、とは語られているところだ。

「*内裏の御けしきあること(帝の御意向で女二の宮を私に降嫁させなさるということを)、まことに*思したたむに(本当にお決めなさる時に)、かくのみもの憂くおぼえば(私がこのように気乗りしないでは)、いかがすべからむ(済むものではない)。おもだたしきことにはありとも、いかがはあらむ(名誉なことだが、どうしたものか)。いかにぞ(どうなんだろう)、故君にいとよく似たまへらむ時に、うれしからむかし(故姉君に良く似ていらっしゃったら嬉しいのだが)」と思ひ寄らるるは(と興味が持たれるのは)、さすがにもて離るまじき心なめりかし(そうは言っても、まんざら無関心ではなさそうです)。 *「うちのみけしき」は<女二の宮を薫君に降嫁させるという帝の御意向>のこと、らしい。 *「おぼしたたむ」は注に<主語は帝>とある。「思し立つ」の未然形に意志の助動詞「む」が付いたものの連体形で<御決心なさる場合>。

[第二段 薫と按察使の君、匂宮と六の君]

*例の(匂宮の婚礼から帰った薫君はいっそう例の対の御方が気懸かりで)、寢覚がちなるつれづれなれば(寝付けないままどうする手立ても無しに)、*按察使の君とて、人よりはすこし思ひましたまへるが局におはして(按察使の君と言って他の女房よりは少し気に入っていらっしゃる馴染み上臈の部屋にいらして)、その夜は明かしたまひつ(その夜は明かしなさいました)。 *「例の」は一般的に<いつものように>と言っているのではないだろう。匂宮と源氏六姫との婚礼祝いの席から帰った薫君は、心細く独り寝しているであろう二条院の西の対の御方が<この日は尚更に>気懸かりだった、という意味なのだろう。であれば、「例の」ではなく<さすがに>と言うべきにも思うが、場面転換や語り運びの語調から、此处では「例の」となっている、と置いて置く。 *「あぜちのきみ」は注に<薫の母女三宮付きの女房。上臈の女房。ここだけに登場する。薫の召人。>とある。按察使大納言の家柄の女なのだろうか。ところで、この召し人は物語としては「ここだけに登場する」ようだし、「例の」も<普段どおり>という一般語用ではないものの、薫君は普段からこのように気ままに召人を相手にする独身貴族生活の中で、結婚や出家を考えていた、という事情は、私とはあまりに違う雲上世界なので、その心算でこの物語を読まないで全くの見当違いをしかねないと、よくよく心して置かねばならない。と言っても、この物語はとっくに私の理解は超えている事情だし、そうした王朝特権階級の粉碎や消滅に何ら一片の同情も無いが、それでも、また、それだけに、安易に生活感を共有することは厳に慎みたい。

明け過ぎたらむを(夜明けに中納言が上臈の部屋に居て人目に付いても)、人の咎むべきにもあらぬに(誰も咎め立てするものでもないのに)、苦しげに急ぎ起きたまふを(極まり悪そうに急いで起き出さるのを)、ただならず思ふべかめり(按察使の君は変に思ったようです)。

「うち渡し世に許しなき関川を、みなれそめけむ名こそ惜しけれ」(和歌 49-10)

「身代わりに 傍迷惑な 手慰み」(意訳 49-10)

*注にく按察使君の贈歌。「関川」は逢坂の関の川。「塞き」「関」の懸詞。「見慣れ」に「水馴れ」を響かす。「渡し」は「川」の縁語。『完訳』は「早々と帰る薫を恨む歌」と注す。>とある。「打ち渡し」はくざっと見渡して＝おおよそ>という慣用句らしいが、いかにも「せきかは」の「川」に縁付けた詠み方なのだろう。さて、関川だが、是は何の前振りも無く詠み込まれている地名なので歌枕とか言うものだとしても、私にはひどく唐突だ。当時の読者や現代の識者には常識の、其と知れる下敷きの先行歌や逸話があるに違いないと、「逢坂・関川」でウェブ検索したら、「趣味の漢詩と日本文学」ブログに「大和物語・百六段」が解説掲載されていた。其処では、遊び人の男の言い寄りに警戒する女の場面で「関川」を詠み込んだ歌の応酬があって、「関川」はく堰き止められて流れない情>の語用で、ほぼく薄情>の意味で女が男の浮気を疑っている。百六話自体は、そんなに臆病だと後悔しますよ、と男が突き放すと、女には遊びの恋は無い、と女も更に拒む、という行き違いの場のまま終わっているが、全体に遊び心のある歌の応酬なので、純愛純情話ではなくて、どれだけ気の利いた遣り取りを楽しめるかという社交術の趣きだ。ともあれ、此処で按察使の君は、薫君が他の女を気にしている、という疑いを薫君にぶつけている、という意味になりそうだ。「なれそむ」は「成れ初む」ではなく「馴れ染む」。「名こそ惜しけれ」はく(薄情な男が相手なのに、懇意だと)噂されるのが辛い>。

いとほしければ(薫君は女に不憫を感じて)、

「深からず上は見ゆれど関川の、下の通ひは絶ゆるものかは」(和歌 49-11)

「いや何も 見掛けただだよ 冷たさは」(意識 49-11)

*注にく薫の返歌。「関川」の語句を用いて返す。『異本紫明抄』は「浅くこそひと見るらめ関川のたゆる心はあらじとぞ思ふ」(大和物語)を指摘。>とある。指摘歌は大和物語百六話での男の贈歌で、女の返歌は「関川の(せきかはの)岩間を潜る(いはまをくぐる)水浅み(みづあさみ)絶えぬ可くのみ(たえぬべくのみ)見ゆる心を(みゆるころを)」とのこと。それにしても、当返歌はく上辺はそうでもちゃんとするから>とかく魚心あれば水心>みたいな定型句というか愛想というか、余りにも御座成りの慰めで、「人の咎むべきにもあらぬ」立場であれば尚更に、心此処に在らず、を却って認めた形になっているような気がする。どうなんだろう。と思ったら、本文にも下に「この上の浅さはいとど心やまし」と、当歌の失敗をなじっている。「関川」に連られて「下の通ひは絶ゆるものかは」と上手く言えた心算で、辻褄を合わせようと「深からず上は見ゆれど」とつい口が滑ったのだろうが、つい油断が出てしまった時は本音が表れるものだ。始末が悪い。貴族の実生活でも、こういうことは多々あったのだろう。作者はちょっとした笑い話の心算で挿入したのだろうが、私はその記録性を信じたい。

深しと(こういう帰り際の場面で愛人に愛情は深いと)、のたまはむにてだに頼もしげなきを(言い訳を仰るのでさえ心細いものを)、この上の浅さは(更に「深からず」と仰ったのでは)、いとど心やましくおぼゆらむかし(いっそう気まぜく思われたのでしょう)。妻戸押し開けて(薫君は妻戸を押し開けて)、

「まことは、この空見たまへ(本当は、この空を見て御覧なさい)。いかでかこれを知らず顔にては明かさむとよ(どうしてこの夜明けの風情の味わいを見捨てて済まそうか)。艶なる人まねにてはあらで(風流人を気取るのではないが)、いとど明かしがたくなり行く(ますます夜長になる)、夜な夜なの寝覚には(秋の寝覚めには)、*この世かの世までなむ思ひやられて、あはれなる(世の幽玄さが思われて感慨深い)」 *「この世かの世まで」は注にく『完訳』は「来世。大君追慕の気持」と注す。

>とある。言い方としては<現世や来世まで>だが、何を言っているのか分からないし、その分からない所がミソなのだろう。下に「言ひ紛らはして」と明示されているのだから、薫君は訳の分からないことを言って誤魔化したのであり、聞いた方は何か深い訳でも有りそうだと思います。遣らざるを得ない上臆の立場だ。

など、言ひ紛らはしてぞ出でたまふ(などと言ひ紛らわして自室にお帰りになります)。ことにをかしきことの数(薫君は特に女を褒めたりしないが)、さまのなまめかしき見なしにやあらむ(物腰が優しそうに見える所為か)、情けなくなどは人に思はれたまはず(薄情者とは思われなさいません)。*かりそめの戯れ言をも言ひそめたまへる人の(遊びの情事で口説きなされた相手の女が)、気近くて見たてまつらばや(薫君の御側でお仕えしたい)、とのみ思ひきこゆるにや(と思ひ詰めてか)、あながちに(無理強いして)、*世を背きたまへる宮の御方に(出家なされて女房の新規募集の必要が無い母親の三条宮邸に)、縁を尋ねつつ参り集まりてさぶらふも(縁を頼って参集して仕え申しているのも)、あはれなること(薫君は誰と言って御部屋様に迎える気は無いので、遣る瀬無い女たちが)、ほどほどにつけつつ多かるべし(それぞれの身分に応じて多様な様相で暮らしていました)。*「かりそめのたはぶれごと」は<遊びの情事>だが、この辺の事情は匂宮部卿巻二章五段に実に適格な説明があったし、匂宮巻は十代の時の話なので、十代であれば、つい女の色香に迷って手を出した女が多いのも、健康な高家の男なら自然なこと(薫君も今や26歳だから、好い女が居れば手は出すだろうが、厭世観もあることだし、十代の時ほどは盛んではないだろう)。*「世を背きたまへる宮」は注に<薫の母女三宮。>とある。この事情も匂宮巻二章五段に詳しい。

宮は(匂宮は)、女君の御ありさま(妻に得た六姫の御姿を)、昼見きこえたまふに(昼の明るさの中で拝し申しなさると)、いとど御心ざしまさりけり(いっそうお気に召しました)。「宮」は匂宮だ。この主語は文意から察するに難くない。が、問題は此処で舞台は六条院に変わるので、段変え校訂は在って然るべきではないか。こういう疑問は他のところでも何度も持った気がするが、特に此処は、語り口調のトーンやテンポがはっきりと上文とは異なっているように見える。

おほきさよきほなる人の(背丈も程よい人で)、*様体いときよげにて(姿勢がとても良く)、髪(髪の下がり具合の形や)、頭つきなどぞ(額の形など)、ものよりことに(殊に優れて)、あなめでた(ああ美しい)、と見えたまひける(とお見えなさいます)。色あひあまりなるまで匂ひて(肌の色艶はみずみずしく)、ものものしく気高き顔の(非常に整った気品ある顔立ちで)、まみいと恥づかしげにらうらうじく(眼差しがドキッと緊張するほど大きくつぶらで)、すべて何ごとも足らひて(全て満足に備わって)、容貌よき人と言はむに(美人と言って)、飽かぬところなし(言い尽くせません)。*「様体(やうだい)」は<容姿>と古語辞典にあるが、顔立ちでないのは分かるものの、肉付きなのか質感なのか何だか捉え所が無い言い方だ。「いときよげ」という語感からは太っては居ないような感じだが、痩せて居ないことは「ささやかにあえかになどはあらで」(三章三段)と既に語られているので、程よい肉付き、みたいなことかも知れないが、「きよげ」の語感から<姿勢の美しさ>と取って置く。

*二十の一つ二つぞ余りたまへりける(六姫は21,2歳でいらっしやいます)。*注に<六の君の年齢。>とある。やっと明示された。これで人物紹介に年齢が表示できる。玉鬘とは違って、ずっと親掛かりで育った割には高齢の裳着になったような気もするが、まあ、妥当な線だろうか。ただ、実母の典侍の君は52歳の源氏殿より年上かと思われ、30歳過ぎの出産ではあったようで、他の兄弟とは歳の差がある娘ではありそう。

いはけなきほどならねば(幼妻ではないので)、片なりに飽かぬところなく(未成熟で物足りないという所も無く)、あざやかに、盛りの花と見えたまへり(見事な盛りの花とお見えになります)。限りなくもてかしづきたまへるに(源氏殿と一条宮がこの上なく大事に御育てなされたのだから)、かたほならず(申し分ありません)。げに、親にては(確かに親としては)、心も惑はしたまひつべかりけり(源氏殿が婿取りに心を惑わせなされたのも無理はありません)。

ただ(それでも)、やはらかに愛敬づきらうたきことぞ(物腰が柔らかく愛嬌があって可愛らしい点では)、かの対の御方はまづ思ほし出でられける(かの対の御方が匂宮には先ず思い出されるのでした)。もののたまふいらへなども(宮の仰る事に答えるのも)、恥ぢらひたれど(六姫は恥らうものの)、また、あまりおぼつかなくはあらず(かといって、頼り無い言い方はせずに)、すべていに見所多く(全てに於いてとてもしっかりしていて)、*かどかどしげなり(賢そうです)。*「かどかどし」は<角が立つ。気が強い。>という言い方でもあるが、必ずしも悪評ではなく<才才しい。才能がある。利口だ。>という褒め言葉でもあるらしい。また、情事に於いては、宮は「ものほこりかになどやあらむ」(三章三段)と懸念したが、六姫は可愛く反応したらしい。しかし、利口だ→我が強い→気位が高い→傷付き易い→敵対心を持つ、という一般傾向からは逃れ難いので、新婚の内は可愛く甘えていても、六姫が浮気者の夫にいつまで従順でいるのかは疑問だ。

よき若どもも三十人ばかり(器量の良い若い女房連中を三十人ほど)、童六人、かたほなるなく(童女六人も見苦しい者は無く)、装束なども、例のうるはしきことは(装束なども有り勝ちな壮麗なものは)、目馴れて思さるべかめれば(宮が目馴れて却って平凡にお思いになるだろうからと)、引き違へ(敢えて)、*心得ぬまでぞ好みそしたまへる(場を弁えないほど源氏殿は地味に趣向を凝らしなさっています)。*「心得ぬ」は<場違い>。「好みそす」の「そす」は「過す(度を越す、熱心にする)」を示す接尾動詞とのことで、「好み過す」は<趣向を凝らす>。「たまへる」の敬語遣いは主語が源氏殿である事を示すのだろう。全ての用意は、六姫自身ではなく、源氏殿の采配だろうし、下文もその語りのまま続くように見える。

三条殿腹の大君を(源氏殿は三条殿腹の長女を)、春宮に参らせたまへるよりも(皇太子に入内させ申しなされた時よりも)、この御ことをば(今回の婚儀を)、ことに思ひおきてきこえたまへるも(特に大事にお考えになっていらっしやったのも)、宮の御おぼえありさまからなめり(匂宮の御評判や御期待の大きさからのようです)。

[第三段 中君と薫、手紙を書き交す]

かくて後(この後、匂宮は)、二条院に、え心やすく渡りたまはず(二条院に気軽にお出掛けになれません)。軽らかなる御身ならねば(正式に妻を得て、気楽な御立場ではなくなったので)、思すままに、昼のほどなどもえ出でたまはねば(思いのままに昼の内も外出できずに)、やがて同じ南の町に、年ごろありしやうにおはしまして(そのまま同じ六条院の南町に、年来暮らしていたようにお出でになって)、暮るれば(夜になったらなつたで)、また、え引き避きても渡りたまはずなどして(また東町の妻を左て置いて二条院には出向けなされなかつたりで)、待ち遠なる折々あるを(対の御方は待ち遠しく思う事が度重なると)、

「かからむとすることとは思ひしかど(こうなるだろうとは思っていたが)、さしあたりては(直面すると)、いとかくやは名残なかるべき(こんなにも全く途絶えてしまうとは)。げに、心あらむ人は(本当に世間が分かっていたら)、数ならぬ身を知らで(分不相応を自覚せずに)、交じらふべき世にもあらざりけり(都の社交に入って良いものではなかった)」

と、返す返すも山路分け出でけむほど(と、返す返すも宇治を出てきた時の事を)、うつつともおぼえず悔しく悲しければ(現実とも思えず悔しく悲しかったので)、

「なほ、いかで忍びて渡りなむ(やはり何とか密かに宇治へ帰ってしまいたい)。むげに背くさまにはあらずとも(すべてを拒むわけではないにしても)、しばし心をも慰めばや(しばらく都を離れて人間関係の気苦労を避けたい)。憎げにもてなしなどせばこそ(しかし、当て付けがましい遣り方をしては)、うたてもあらめ(不都合な事になりそうだ)」

など、心一つに思ひあまりて(などと、自分だけでは解決出来ずに)、恥づかしけれど(悩みを打ち明けるのは気が引けたが)、中納言殿に文たてまつれたまふ(中納言殿に御手紙を差し上げなさいます)。

「*一日の御ことをば(先日の故宮の御法要のことは)、阿闍梨の伝へたりしに、詳しく聞きはべりにき(阿闍梨が伝えて来ましたので、詳しく聞いております)。かかる御心の名残なからましかば(父宮を覚えていらっしゃる殿の御親切が無かったら)、いかにいとほしくと思ひたまへらるるにも(何と寂しいことかと存じられますので)、おろかならずのみなむ(尊く感じ入るばかりです)。*さりぬべくは(付きましては)、みづからも(直接、御礼申し上げたく存じます)」 *「ひとのおおんこと」は注にく以下「みづからも」まで、中君の薫への文。八宮の三回忌の法事をさす。宇治の阿闍梨から既に中君に連絡があった趣。>とある。ただ、「三回忌」ではないだろう。八宮は四年前に亡くなっているので、今回は三周忌または四回忌に当たるはずだ。むしろ、だから比較的地味な年忌法要で、御方も薫君に任せ切ったのであり、匂宮も特に口出しをしなかったのかも知れない。三回忌であったなら、此处まで薫君に任せるものだろうか。尤も、当時の風習など私は知らないので、何を如何と断言できるものではなく、姉君については今年が三回忌に当たるかと思われるが、だからといって、故姉君は特に盛大に行なわれるべき公的な人物でもなさそうな気がする。ともあれ、故宮の命日は八月二十日過ぎなので、その法事が滞りなく執り行われたという阿闍梨からの報告を御方が受けているということは、今は八月末か九月初旬あたりなのだろう。薫中納言が法事の手配をしたことは二章八段に「故宮の御忌日は、かの阿闍梨に、さるべきことども皆言ひおきはべりにき」と、薫君の弁として御方に語られていた。その中納言との先日の面談は、匂宮と源氏六姫との婚儀の直前の八月十六日の朝だったかと思うが、当段頭の「かくて後、二条院に、え心やすく渡りたまはず」までは、匂宮の新婚三日通いの話が語れていて、具体的には八月十九日から日付が飛んでいる。ただ、十月だと冬に入って季節代わりの情緒文が有る筈なので、今はせいぜい九月の秋の内ではありそうだ。 *「さりぬ」は<それに値する、それに適う>で、その<それ>とは「おろかならずのみなむ」という薫君の御厚情。「さりぬべくは」は<その御厚情に御礼申すべく>。「みづからも」は<私からも会って直接に>だろうが、女の方から男の所には出向けない仕来りだったのだろう。注には<『完訳』は「薫の来訪を期待する気持」と注す。>とある。

と聞こえたまへり(とお書きなさいました)。

*陸奥紙に(事改まって檀紙に)、*ひきつくろはずまめだち書きたまへるしも(手馴れた風も無く丁寧にお書きになっている字も)、いとをかしげなり(とても目を引きます)。 *「みちのくにがみ」は厚手の上質紙で高級品とのこと。風流な薄手の鳥の子紙よりは事改まった感じだろうか。 *「引き繕ふ」はく体裁を取り繕う、格好を付ける>だが、薫君相手に今さら御方然とした威厳を示す必要は無いし、まして頼み事であればそういう場合でも無く、むしろ以前に増して事改まった姿勢を見せているのだから、此処ではく気取る、取り澄ます>という語用なのだろう。

宮の御忌日に(みやのおおんきにちに、故八宮の御命日に)、例のことどもいと尊くせさせたまへりけるを(然るべき法要を中納言が手厚くさせなされたことを)、喜びたまへるさまの(御方が喜んでいらっしゃる文面が)、おどろおどろしくはあらねど(仰々しく畏まってはいないが)、げに(本当に感謝していらっしゃる)、思ひ知りたまへるなめりかし(薫君もお分かりになったようです)。

例は(いつもなら御方は)、これよりたてまつる御返りをだに(此方から差し出した手紙の御返事でさえ)、つつましげに思ほして(遠慮なさって)、はかばかしくも続けたまはぬを(はっきりした言を仰らないのに)、「みづから(会って直接に)」とさへのたまへるが(とまで仰るのが)、めづらしくうれしきに、心ときめきもしぬべし(珍しく嬉しいので、薫君は心踊る思いだったに違いありません)。

宮の今めかしく好みたちたまへるほどにて(宮が新しい妻に興味をお持ちになっている時なので)、思しおこたりけるも(御方をお忘れになっているのも)、げに心苦しく推し量らるれば(実に思わしくなく推察されるので)、いとあはれにて(薫君は御方にとても同情されて)、をかしやかなることなき御文を(風情めいたことも無い文面の御方の御手紙を)、うちも置かず(手離すことも無く)、ひき返しひき返し見みたまへり(何度も読み返していらっしゃいました)。

御返りは(そして、御返事は)、

「承りぬ(承知しました)。一日は(ひとひは、先日は)、聖だちたるさまにて(法事の御相談だったので)、ことさらに忍びはべしも(特に目立たないように伺いましたが)、さ思ひたまふるやうはべるころほひにてなむ(それは故宮を偲んで、そうするべきと存じられる時節だったからなのです)。名残とのたまはせたるこそ(地味に事を運んだからといって、残務のように仰るのは)、すこし浅くなりたるやうにと(私の故宮への追悼意が浅くなったようにお思いかと)、恨めしく思うたまへらるれ(残念に存じます)。よろづはさぶらひてなむ(正味の話は伺ってから致しましょう)。あなかしこ(失礼致します)」

と、*すくよかに(と、堅苦しい字で)、白き*色紙のこはごはしきにてあり(白い懐紙を正式の封書にしてありました)。 *「すくよか」はくしっかりしている、堅苦しい、几帳面だ>で、だいたい現代語の<健やか>に近いようだが、文面は冗談を言っているので、是は筆跡字体のことなのだろう。「白き色紙のこはごはしき」もワザとらしい。まして、三条宮邸と二条院の隣接間で。 *「色紙」はくしきし>と読みがあるが、是は懐紙の鳥の子紙の畳紙の<いろがみ>というもののことらしい。「こはごはし」はく強張っている、堅苦しい、無骨だ

>などと古語辞典にあるが、「色紙」は鳥の子紙の懐紙であれば薄手なので、この「強々し」は紙質ではなく、手紙の様式が<堅苦しい>のだろう。

[第四段 薫、中君を訪問して慰める]

さて、またの日の夕つ方ぞ渡りたまへる(そして薫中納言は、その翌日の夕方に二条院の対の御方の許をお訪ねなさいました)。人知れず思ふ心し添ひたれば(内心では御方を思う心があるので)、あいなく心づかひいたくせられて(つい身なりがひどく気になって来て)、なよよかなる御衣どもを(柔らかく精錬された上質の重ね着を)、いとど匂はし添へたまへるは(それぞれに強く薫香を焚き染めて、生来の強い体臭と相俟っていらっしゃるのは)、あまり*おどろおどろしきまであるに(非常に驚くほどの芳香なので)、*丁子染の扇の、もてならしたまへる移り香などさへ(丁子染の扇の常備なさっている移り香さえ)、喩へむ方なくめでたし(例えようも無く素晴らしい)。*「おどろおどろし」は<不気味なほど異様だ>という語感が強くて、「めでたし」に結ぶ肯定意には取り難い語だが、此处では<驚くほどだ>という程度の強さだけを言っているらしい。また、「あまり」という副詞も<過度に>という否定構文を成しがちに思えるが、是も<非常に>という強調意のようだ。*「丁子染の扇(ちょうじぞめのあふぎ)」は丁子の煮汁で茶色に染めた和紙で作った扇子らしい。多分、絶妙な染め加減で色も香りも上品なものだったのだろうが、丁子・チョウジ・クローブの私の印象は仁丹だ。粉末パウダーならスーパーのスパイス売り場で売っている。

*女君も(御方も女心に)、*あやしかりし夜のことなど(妖しい出来事だった中納言との一夜の事を)、思ひ出でたまふ折々なきにしもあらねば(思い出しなざる時が無いでも無いので)、まめやかにあはれなる御心ばへの(この度の故宮の法要につけても、誠実で思い遣りのある中納言の御性格が)、人に似ずものしたまふを見るにつけても(匂宮とは違っていらっしゃるのを知れば)、「さてあらましを(この人と結婚していれば)」とばかりは思ひやしたまふらむ(どのようにお考えになったかかもしれません)。*「をんなぎみ」という呼称はどういう意図なのか。薫君の期待に沿った目線での文、ということだろうか。むしろ、御方自身も女心に薫中納言の「心づかひ」に感じ入った、ということ客観事実として語っているのだろうか。御方にそういう心理はあったらと思うが、それでも、此处で「女君」と言う事には妙に大胆な印象を受ける。*「あやしかりし夜のこと」は注に<大君の策略によって中君が薫と共寝したこと。「総角」巻に語られている。>とある。

いはけなきほどにしおはせねば(御方は男の気持ちに気付かない子供ではいらっしゃらなかった)、恨めしき人の御ありさまを思ひ比ぶるには(中納言の法事の計らいの厚意を、つれない匂宮の御態度と思ひ比べれば)、何事もいとどこよなく思ひ知られたまふにや(全てに於いて中納言がいつそうこの上なく情に厚く思ひ知られなされたのか)、常に隔て多かるもいとほしく(いつも堅苦しく離れて応接しているのも申し訳なく)、「もの思ひ知らぬさまに思ひたまふらむ(中納言は私を人情が分からないようにお思いになるだろう)」など思ひたまひて(と思ひなさって)、今日は、御簾の内に入れたてまつりたまひて(今日は廂の間に中納言をお入れ申しなさって)、母屋の簾に几帳添へて、我はすこしひき入りて対面したまへり(母屋の簾に几帳を添え立てて、自身は少し奥へ引き入って対面なさいました)。「いはけなきほどにしおはせねば」は、「常に隔て多かるもいとほしく」を説明する御方の事情という構文だろうが、だとすると、この「いはけなし」は<分別がつかない一幼稚だ>という言い方になりそうだが、だとすると、「恨めしき人の御ありさまを思ひ比ぶるには、何事もいとどこよ

なく思ひ知られたまふにや」という補足が、一般的なく幼稚さ>ではなく、男を知った「女君」の心理を説明している事になり、薫君の法事執行の厚意が御方への好意を示している事を承知している、という意味で、「もの思ひ知らぬさまに思ひたまふらむなど思ひたまひて」ということになった、と言っているの、この「いはけなし」は<男の気持ちが分からない>とまで明示した方が分かり易い。尤も、現代語でも「もう子供じゃないんだから」と言えば<男を知っているんだから>という意味になる語用は多くあるが、「もう子供じゃないんだから」という言い方自体は<物事の意味が分かるはずだ>という意味で場面に応じて多様に語用されるので、その言い方のままでは古文の言い換えとしては紛らわしい。

「わざと召しとはべらざりしかど(特に御呼び出し頂いたのではございませんが)、例ならず許させたまへりし喜びに(いつになく御対面いただけるとあった喜びに)、すなはちも参らまほしくはべりしを(直ぐにでも伺いたく存じましたが)、宮渡らせたまふと承りしかば(昨日は宮様がお出でと承りましたので)、折悪しくやはとて(お邪魔かと思ひ)、今日になしはべりにける(今日参上いたしました)。さるは(それにしても)、年ごろの心のしるしもやうやうあらはれはべるにや(年来の努力の甲斐もようやく現れて来たか)、隔てすこし薄らぎはべりにける御簾の内よ(遠さが少し薄らいだ御簾内へのお許しとは)。めづらしくはべるわざかな(有難く存じます)」

とのたまふに(と薫君が仰ると)、なほいと恥づかしく(御方はやはりとてもきまり悪く)、言ひ出でむ言葉もなき心地すれど(言い出す言葉も無い気がするが)、

「一日(先日、故宮の法要を立派に挙げて頂きました事を)、うれしく聞きはべりし心の内を(嬉しく聞き申しましたこの気持ちを)、例の(いつものように)、ただ結ばほれながら過ぐしはべりなば(ただ自分の中にだけ仕舞い込んで、口に出さずに過ごしてしまつては)、思ひ知る片端をだに(感じ入った感謝の一端すら)、いかでかはと(どうしてお分かり頂けようかと)、口惜しさに(残念で)」

と、いとつつましげにのたまふが(と、とても慎ましげに仰るのが)、いたくしぞきて(とても奥へ退いて)、絶え絶えほのかに聞こゆれば(絶え絶えに小さく聞こえるので)、心もとなくて(中納言は物足りずに)、

「いと遠くもはべるかな(遠すぎて良く聞こえません)。まめやかに聞こえさせ(じっくりとご相談申し上げ)、*承らまほしき世の御物語もはべるものを(御用命を承りたい世情の話もございませぬのに)」 *「承らまほしき世の御物語」は御方には、薫君が二章七段で相談していた「かしこは、なほ尊き方に思し譲りてよ(あの山荘はやはり尊い御参所と思ひ山寺にお譲りなさつて)、時々見たまふるにつけては(時々御見舞申すたびに)、心惑ひの絶えせぬもあいなきに(姉君への執着が忘れられないのも困るので)、罪失ふさまになしてばや(そういう業罪を消滅させるような形にしてはどうか)、となむ思ひたまふるを(どのように考えておりますが)、またいかが思しおきつらむ(他に何かお考えがございませぬでしょうか)」という山荘の処分問題のことに聞こえるような、薫君の話しっぷりだ。「世」という語は曲者だ。

とのたまへば(と仰ると)、*げに、と思して(御方も確かに山荘の処分などを考えなければとお思いになつて)、すこしみじろき寄りたまふけはひを聞きたまふにも(少し身じろいでにじり寄りなざる気配をお聞きになるのも)、ふと胸うちつぶるれど(薫君は胸つぶれる思いだが)、さりげ

なくいとど静めたるさまして(さり気無くいっそう落ち着いた態度で)、宮の御心ばへ(匂宮の御愛情が)、思はずに浅うおはしけりとおぼしく(思いの他に浅くいらっしやったと思えるように)、かつは言ひも疎め(宮を非難し)、また慰めも(御方を慰めて)、かたがたにしづしづと聞こえたまひつつおはす(それぞれの事情を静かに申し上げなさりつつ話し込まれます)。*「げに」は御方が山荘の処分に付いての相談と書いたことを示している、のだろう。

[第五段 中君、薫に宇治への同行を願う]

女君は(夫人の御方は)、人の御恨めしさなどは(夫宮の御非難などは)、うち出で語らひきこえたまふべきことにもあらねば(口に出して話し申しなさるべき事ではないので)、ただ、世やは憂きなどやうに思はせて(ただ世の中はままたまらないような言い方で)、言少なに紛らはしつつ(言葉少なに物事をはっきりさせずに)、山里に*あからさまに渡したまへとおぼしく(宇治の山里にほんの少しの間でもお連れ下さいと御希望のように)、いとねむごろに思ひてのたまふ(とても熱心に思い申しなさいます)。*「あからさま」は<急だ、ほんのちょっとの間だ>という意味の形容動詞と古語辞典にある。現代語の「あからさま」が<明らかな状態→明白だ、露骨だ>という言い方なので、かなり戸惑う。古語辞典には「あから」は「別る・離る(あかる)」と同源との示唆もあるが、「別れ」が<急、寸暇>を意味するというのも分かり難い。むしろ、「あ」は強調の接頭語で、「から」は「辛し」の語幹と同源の<ぎりぎり>で間に合う>という語感に私には思えるが、成立史上に無理なのだろうか。

「それはしも(それは決して)、心一つにまかせては(私の一存では)、え仕うまつるまじきことにはべり(御世話も申せません)。なほ、宮にただ心うつくしく聞こえさせたまひて(やはり宮にただ素直にご相談なさって)、かの御けしきに従ひてなむよくはべるべき(その御判断に従ってこそお仕え申せます)。さらずは、すこしも違ひ目ありて(そうでなければ、少しでも行き違いが生じて)、心軽くもなど思しものせむに(軽率なことと宮が誤解なさったら)、いと悪くはべりなむ(とても不都合な事になりましょう)。さだにあるまじくは(そういう心配さえ無ければ)、道のほども御送り迎へも(行き来に際して御送り迎えも)、おりたちて仕うまつらむに(何を置いてもお仕え申すのに)、何の憚りかははべらむ(何の問題もありません)。うしろやすく人に似ぬ心のほどは(私が安心して任せられる誰よりも適任者だということは)、宮も皆知らせたまへり(宮も良く御存じです)」

などは言ひながら(などと言いながら)、折々は、過ぎにし方の悔しさを忘るる折なく(何度も中納言は自分が妹君を得損ねた過去の後悔を忘れた事が無く)、ものにもがなやと(出来るものならと)、取り返さまほしきと(あの日に立ち返りたいと)、ほのめかしつつ(打ち明けては)、やうやう暗くなりゆくまでおはするに(だんだん暗くなる時分までお帰りにならないので)、いとうるさくおぼえて(御方はとても負担を感じて)、

「さらば(ではそろそろ)、心地も悩ましくのみはべるを(体も疲れてきましたので)、また、よろしく思ひたまへられむほどに(また体調の良い時に)、何事も(ご相談致したく)」

とて、入りたまひぬるけしきなるが(と言って御方が奥へお入りになってしまいそうな気配が)、いと口惜しければ(中納言はとても残念で)、

「さて、いつばかり思し立つべきにか(それでは何時ごろに出発なさるおつもりですか)。いとげくはべし道の草も(だいが茂った道中の草も)、すこしうち払はせはべらむかし(少し刈り取らせて置かなければなりませんから)」

と、心とりに聞こえたまへば(と気を引くように申しなさると)、しばし入りさして(御方はしばし足を止めて)、

「この月は過ぎぬれば(今月はもう終わりなので)、*朔日のほどにも(来月の初旬にでも)、とこそは思ひはべれ(とは思っております)。*ただ、いと忍びてこそよからめ(ただ、やはり内密に出かけるのが良いでしょう)。何か、*世の許しなどことごとく(何も、宮の許しなど事改まって、得るのは面倒です)」 *「ついたちのほど」は注に<来月の九月の上旬頃に、の意。>とある。この日は八月末だったらしい。とすると、当章三段の初めに「かくて後、二条院に、え心やすく渡りたまはず」とあったのは、時間経過ではなく、宮の立場を改めて示した文だったようだ。そんなに長期間でもないが、宮が六条院にばかり居る事に、御方は直ぐ反応した、ということらしい。尤も、懸念が顕在化した、ということでは、普通の反応かも知れないが。 *「ただ、いと忍びてこそよからめ」は、薫君が宮に内緒では不穏当だと注意したにも関わらずの返答としては、如何にも不穏当だし、問題発言だ。が、それだけに、薫君は気分をそそられるかもしれない。 *「よのゆるし」は注に<夫句宮の許可。>とある。何故、宮を「世」と言うのか。こういう言い方をするものだと思うしかない、のか。しかし、この<世間を気にしない>みたいな言い方は薫君でなくても扇情的に聞こえる。

とのたまふ声の(と仰る声が)、「いみじくらうたげなるかな(何とも意地らしい)」と、常よりも昔思ひ出でらるるに(と薫君にはいつになく故姉君が思い出されて)、えつつみあへで(つい我慢できずに)、寄りみたまへる柱もとの簾の下より(寄り掛かっていらっしゃった柱近くの簾の下から)、やをらおよびて(そっと手を伸ばして)、御袖をとらへつ(御方の袖を掴みました)。

[第六段 薫、中君に迫る]

*女(誘うともなく迫られた女の立場の御方は)、「*さりや(まさか此处でこんな)、あな心憂(ああ困る)」と思ふに、何事かは言はれむ(と思うが、何と言えようか)、ものも言はで、いとど引き入りたまへば(何も言えずに、ずっと奥へ引き下がりなされると)、それにつきていと馴れ顔に、半らは内に入りて添ひ臥したまへり(それに連れて中納言もすっかり馴れ馴れしく、半身を簾の中に入れて御方に添い寝なさいました)。 *「をんな」は注に<中君。恋の場面での呼称。>とある。確かにドキッとする呼称で、また実際に衝撃的な場面で、此处に至る諸々の事情や社会的立場が脱ぎ捨てられて、正味の男と女が剥き出しになる濡れ場なのだろう。しかも、上文の御方の発言を受けて薫君が手を出す、という演出は、この「女」が誘ったようでもあり、現に迫られているのもあって、言うに言われぬ濃密さが表現されている名場面かもしれない。 *「さりや」の「さり」は「さ(のように)あり」の短縮で<(やはり)そうだった>と、予期された結果に対する確認意が示される言い方らしい。「や」の係助詞は疑問や反意の場合が多いが、基本的にその一事象を客観視して、周辺事情からその事象の意味を総合的に判定して自分の行動を判断しようとする論理語であり、「さりや」は一般的には<やはり、そうだったか>という言い方なのだろう。しかし此处では、御方は薫君の下心は十分承知しているし、それらしい言葉さえ薫君は口にしているが、またそれだけに、さすがに言葉だけのこと、とは即ち、一歩引いた冷静な判断状態と見做せるし、そういう好意を期待したいという女の狡猾さで接していて、四段・五段で呼称された「女君」はその御方の狡猾な主体的な姿勢を示していたかとも思われ、今のこの場で迫られることまでは

予期していなかった、少なくとも期待していなかった、ように私は思う。だから、確かに大枠では予想の範囲なので「さり」ではあるだろうが、「や」の語感は<やはり>ではなく<まさか(今は)>と間投詞寄りに読みたいし、であれば「さり」は<こんなことまで>だろう。

「あらずや(近くにという事ではないんですか)。忍びてはよかるべく思ふこともありけるがうれしきは、ひが耳か(内緒の御相談があると聞いて嬉しく思ったのは聞き間違いでしょうか)。聞こえさせむとぞ(御話をお聞き申そうと、こうして御側に参ったのですから)、疎々しく思ふべきにもあらぬを(嫌がるのは変でしょうに)。心憂のけしきや(迷惑そうですね)」

と怨みたまへば(と薫君が不平を仰ると)、いらへすべき心地もせず(御方は応える気もせず)、思はずに憎く思ひなりぬるを(思わず腹立たしくなるのを)、せめて思ひしづめて(なんとか気を鎮めて)、

「思ひの外なりける御心のほどかな(常識外れの御考えです)。人の思ふらむことよ(女房たちがどう思いますことか)。あさまし(呆れます)」

とあはめて(と軽蔑して)、泣きぬべきけしきなる(泣きそうな様子なのが)、*すこしはことわりなれば(幾らかは無理も無いので)、いとほしけれど(同情もされるが)、*「すこしは」は分かり難い。「ことわり」ではなく「いとほし」に掛かるとしても、この「少し」は量や程度ではなく部分や一面を示すのだろう。ただ、日常語としては現代語でも「少しは分かる」みたいな言い方は良くある。情状酌量みたいなことで、逆に言えば、核心はそれとは違うという意味だ。

「これは咎あるばかりのことかは(これは難じられる事ですか)。かばかりの対面は、いにしへをも思し出でよかし(こうした直の面会は、前にもあった事を思い出してください)。過ぎにし人の御許しもありしものを(亡くなった姉君の御許しもあったというのに)。いとこよなく思しけるこそ(まるで非常識のようにお思いの方が)、なかなかうたてあれ(却って追悼に反します)。好き好きしくめざましき心はあらじと(色事目当ての浅ましい気持は無いと)、心やすく思ほせ(安心して下さい)」

とて(と言って中納言は)、いとどのどやかにはもてなしたまへれど(とても穏やかにはしていらっしやっただが)、*月ごろ悔しと思ひわたる心のうちの(匂宮と源氏姫の婚儀が決まって以来のこの数ヶ月に、御方を匂宮に譲り申したことを後悔し続けている気持ちが)、苦しきまでなりゆくさまを(苦しいほどになって来たのを)、*つくづくと言ひ続けたまひて(執念深く言い続けなさって)、*許すべきけしきにもあらぬに(袖を掴んだ手を緩めそうにないのを)、*せむかたなく(御方は抗しようも無く)、*いみじとも世の常なり(窮地の極みです)。*「月ごろ」は年をまたいでいない期間だから、妹君が二条院に引越してきてからのこと、とは解せない。確かに、早蕨巻二章二段には妹君の二条院入り当初から薫君が気を揉んでいたと語られていたし、妹君の引越しは昨年(今)の二月七日(早蕨巻二章一段)で、薫君が三条宮邸に六条院から引越したのも昨年の二月二十日過ぎ(早蕨巻二章二段)なので、隣接地に住んで以降に気持ちがいっそう募ったのかもしれないが、「月ごろ」とある以上は今年になってからの事情を言う。であれば、是は匂宮の源氏六姫との結婚以来の想念かと思われるが、今がまだ八月という事になると、この結婚自体は同月内の最近の事柄で「月ごろ」とは言えない。となると、薫君が思いを募らせたのは、皮肉にも薫君自身の事情として、女二の宮

との婚儀が本格化した故藤壺女御の一周忌明け、とは即ちこの夏以降(二章一段)であり、具体的には「このさつきばかりより例ならぬさまに悩ましくしたまふこともありけり」(二章二段)という御方の懐妊時期に重なり、御方の懐妊を知って薫君は横恋慕したのではないが、故君への追想が五月ごろから強まったとは語られていたので、それ以降のここ3~4ヶ月を言うのだろう。しかし、その正味の事情は自身の女二の宮との婚儀の進行であり、それは御方には言えないので、匂宮の別婚を、その話が本決まりになって以来、という言い方をしたものと読んで置く。*「つくづく」は<しみじみ>ともあるが、此处では<尽きもせずいつまでも→執念深い>と聞こえる。*「許すべきけしき」は注に<中君の袖を放そうとしないこと。>とある。手を緩める、という言い方らしい。こういう文は私には分かり難い。*「せむかたなし」は「為む方無し」で<手立てがない>。注には<『完訳』は「以下、中の君の心に即す表現」と注す。>とある。此处で対象語が変わるのは、上文が「けしきにもあらぬに」と一方の対象の状態をまとめているので、それなりに分かり易い。*「いみじとも世の常なり」は注に<『集成』は「つらいどころの話ではない。「いみじ」と言った言葉では月並みな表現に終る、の意。中の君の気持を代弁する草子地」と注す。>とある。「いみじと(言ふ)も世の常なり」の短縮で定型句なのだろう。

なかなか(御方は故姉君の事を持ち出されたりすると、却って)、むげに心知らざらむ人よりも(全く宇治の事情を知らない他人よりも)、恥づかしく心づきなくて(中納言との仲が極まり悪く心外で)、泣きたまひぬるを(泣いてしまわれるのを)、

「こは、なぞ。あな、若々し(是は何とまた、子供じみた)」

とは言ひながら(とは言いながら中納言は)、言ひ知らずらうたげに(御方が言い様も無く可憐で)、心苦しきものから(気持ちを抑えるのが大変だったが)、用意深く(身持ち堅く)恥づかしげなるけはひなどの(毅然とした態度などが)、見しほどよりも(以前の夜明かしの時よりも)、こよなくねびまさりたまひにけるなどを見るに(数段大人びていらっしゃるのを見ると)、「心からよそ人にしなして(自分自身で他人の妻にしてしまつて)、かくやすからずものを思ふこと(こんなに後悔するとは)」と悔しきにも(と惜しまれて)、またげに音は泣かれけり(中納言の方も実際に声を上げて泣けてしまいました)。

[第七段 薫、自制して退出する]

近くさぶらふ女房二人ばかりあれど(近くに控えている女房が二人ほど居たが)、すずろなる男のうち入り来たるならばこそは(何の関係も無い男が侵入してきたのなら)、こはいかなることぞとも、参り寄らめ(一大事と寄り来るものを)、疎からず聞こえ交はしたまふ御仲らひなめれば(親しく話し合いなさっている御関係なので)、さるやうこそはあらめと思ふに(泣き合いなさるほどの深い事情の御話があるのだろうと)、*かたはらいたければ(泣き声を聞くのも遠慮されて)、知らず顔にてやをらしぞきぬるに(別の用があるような顔をして退いたので)、いとほしきや(成り行きが案じられることです)。*「かたはらいたし」は<傍らにいるのが不都合だ→気が引ける、遠慮される>。注には<『集成』「お側近くは憚られるので」。親密な語らいの場合は女房は座を遠慮した。>とある。この女房の気配りは非常に曲者だ。男の取次も女房の心積もり次第ということだったようだし、勿論、それを踏まえて主人は女房の人選をするのだろうが、際どい現場判断は女房に任せられる、という事情は非常に重い。女房語りのこの物語が王朝時代の核心を体現していると評価される所以だろう。

男君は(薫君は男心に)、いにしへを悔ゆる心の忍びがたさなども(以前の体を求めなかった事を後悔する気持ちから来る興奮も)、いと静めがたかりぬべかめれど(とても鎮め難かっただろうが)、昔だにありがたかりし心の用意なれば(その時でさえ手を出さなかったという奇特的な性格の持ち主なので)、なほ*いと思ひのままにももてなしきこえたまはざりけり(今回もただ一方的のままには事に及ぼうとなさいませんでした)。 *「いと思ひのままにももてなしきこえたまはざりけり」はくすっかり思い通りにも応接申しなさいませんでした>みたいな言い方だが、薫君の事情に即して言い換えるならく決して一方的に押し付けなさらなかった>のだろう。薫君は必ず相手の積極性を必要とする性癖だ。しかし、「いと思ひのままにも」は一定の条件項であって、薫君の行動制限を示す言い方ではあるが、同時にまた、一切手出しをしなかったのでは無く、無理矢理強引には事を運ばなかったものの、相当強く迫ったらしい事を窺わせる微妙な言い回しになっていることに、むしろ興味は煽られる。

*かやうの筋は(こうした濡れ場の事柄は、何しろ側近女房が席を離れてしまっていたので)、こまかにもえなむ*まねび続けざりける(事細かには具体的に話し続けられません)。 *「かやうの筋」はくこのような話=濡れ場の描写>であり、下文に「よろづに思ひ返して出でたまひぬ」とあるので、薫君は結局は最後までは果たさなかつたらしいと知れるが、此処の言い方からは、むしろ情事があつたかのような印象を受ける。 *「まねぶ」は具体的に模写して伝える→真似る、または、具体的に模写して技を身に付ける→学ぶ、という言い方のようなのだが、此処では、真似て伝える→具体的に話す、ということだろう。

かひなきものから(折角の機会を逸しては、是までの段取りが徒労に終わるが)、人目のあいなきを思へば(情事に及んで、女房たちに不義が知れる不都合を思えば)、よろづに思ひ返して出でたまひぬ(薫君は結局は思い直して、迫っただけで実事に至らぬままお帰りをなさいました)。

まだ宵と思ひつれど(まだ夜も浅い内と思っていたが)、暁近うなりにけるを(夜明け前になっていたのを)、見とがむる人もやあらむと(薫君の朝帰りを咎める女房もいるだろうかと)、わづらはしきも(薫君が気苦勞に思われるのも)、女の御ためのいとほしきぞかし(相手の女の御方の立場を案じてのことだったのです)。

「*悩ましげに聞きわたる御心地は(不調とお聞き申していた御体調は)、*ことわりなりけり(本当のことだった)。いと恥づかしと思したりつる*腰のしるしに(御方がとても隠したがっていらした腹帯に御懐妊を知り)、*多くは心苦しくおぼえてやみぬるかな(主にその母体への犯すべからざる畏れから気後れして自制してしまった)。*例のをこがましの心や(また生来の母性に臆病の所為だ)」と思へど(と薫君は思うが)、 *「悩ましげ」はく体調が思わしくない>またはく体調が悪そう>みたいな言い方らしい。注にはく以下「をこがましの心や」まで、薫の心中の思い。中君の身体の加減が悪いということ。>とある。 *「ことわりなり」はく尤もだ、理解できる、本当だ←理由が分かる>みたいな言い方だろうが、薫君が納得できた理由は下文の「いと恥づかしと思したりつる腰のしるし(御方がとても隠したがっていらした腹帯)」に気付いたかららしく、ということは、御方の懐妊を知って体調の不良を納得した、という事情が語られている事になる。「けり」は事態認識を示す助動詞で、此処では納得の表現だろう。 *「腰のしるし」は注にく懐妊のしるしの腹帯。『集成』は「衣装のふくらみに薫の手が触れたものであろう」と注す。>とある。二章二段にこの五月頃から悪阻があつたらしい記事があり、今は八月末らしいので妊娠四ヶ月以上ではありそうで、腹帯祝い妊娠五ヶ月目の戌の日に行なう、といった記事が犬印妊婦帯本舗の豆知識ページなどに掲載されていることに、何となく符合する。が、薫君が気付いたということは、ちょっと触れただけの事ではないだろうし、御方に言葉で

も確かめたに違いなく、であれば当然に、匂宮も既に御方の懐妊を知っているし、まして女房たちは疾うに承知している、ということになりそうだ。夏の内はまだ周囲にははっきりとは妊娠と気づかれていない様な記事があったかと思うが、懐妊の周知は重要な事情だろうに今まで語られず、此处でこういう形で述べられる作者の意図は、ドラマ構成上は意外な命の存在を持ち出して話の展開に複雑さを図る心算なのだろうが、御方の妊娠事情を忘れる読者もいないだろうし、薫君がはっと気付いた此处の場面で周知を持ち出すのは如何にも常套手法の、ちょっと見え透いた手の内だ。 *「多くは」は<母体の神聖さ>と解して置く。 *「例のをこがましの心や」は難しい。薫君の勃起には女の積極さが必要なことは既に何度も語られている。しかし、この「例の」はそういう性戯・性癖事情とは違うようだ。が、同根だという見方も出来るかも知れない。自身の出生にわだかまりのある薫君は、子を設けない情事については頓着しないし、膣以外の女の手や口や素股での射精なら気ままに遊んでいたいのが、身分のある女を相手に子を儲ける実情を果たし、家を構える事に付いては女にせがまれて止むを得なかったという言い訳が自分の正当化に必要だ、と考えていた、ということになっているらしい。その本質的な生物生命観からする正当性については疑問だが、経済的な余裕がそういう甘さを許した、という社会性心理に付いては、存在の正当性が無い以上は同様の社会的評価を受け続ける資格が無い、という判断にそれなりの説得力はあるように思う。で、その“出生のわだかまり”は、母体への畏敬、というよりは嫌悪に近いのかもしれないが、に重圧感があり、とにかく直視に耐えない逃避欲を覚える、という心理は有り得るような気がする。そのように解せば、この「例の」も<生来の>かもしれないし、「をこがましの心」は与謝野訳文にあるように<臆病だ←非積極性>と言えるように思う。

「*情けなからむことは(今の御方の事情を無視して負担を掛け加えるのは)、なほいと本意なかるべし(宮の薄情や私の情熱という事情以上に、御方を悲しませてしまうので、全く本心に反してしまう)」。 *「なさけなし」は<思い遣りが無い。薄情だ。>と古語辞典にあるが、此处での事情は、子育てに向けて安定した生活を望むに違いない御方に、いくら匂宮の薄情や薫君の情熱があったとしても、この時点で余計な波乱を与えて負担をかけるのは可哀相で忍びない、と薫君は考えたように思うので、左様明示したい。なお、「なほ」は<更に、それ以上に>という副詞だが、その「それ」には上説した通りの具体的な意味が込められた言い方になっている、かと思う。

また(それにまた)、たちまちのわが心の乱れにまかせて(性急な興奮した判断で)、あながちなる心をつかひて後(強引に体の関係を結んだ後は)、*心やすくしもはあらざらむものから(気まづくなくなってしまう立場同士なのだから)、わりなく*忍びありかむほども*心尽くしに(私も不都合に忍び通いするのも難しく)、女の*かたがた思し乱れむことよ(相手の女である御方は、私であれ匂宮であれ、どちらにしても夜離れて思い悩みなさる事だろう)」 *「心やすくしもはあらざらむ」は<中君は人妻である>と注にある。気まづい立場、ということだろう。 *「忍び歩かむ」の主語は薫君。 *「心尽くし」は訳文に<苦勞が多い→気苦勞だ>とある。確かに、語意は<いろいろと配慮を尽くす必要がある>だろうから、是を<気苦勞になる>という語用は一般的に妥当なのだろうが、この場合の状況では<苦勞する>のではなく、いろいろと配慮した結果<無理だと結論付く→難しい>という語用かと思う。従って薫君は、情交した結果、却って二人は会えなくなる、という事情を言っているのだろうし、その文意で「をんなのかたがたおぼしみだれん」を読むべきだ。 *「かたがた」は注に<夫匂宮に対しま自分薫に対して悩む。>とある。

など、さかしく思ふに*せかれず(などと理屈立てて考えてみようにも情念は抑え切れず)、*今の間も恋しきぞわりなかりける(自室で休む今も、恋心が募るのは困った事でした)。さらに見ではえあるまじくおぼえたまふも(やはり自分が娶らずにいるのは正しく無いと思えなさるのも)、返す返すあやにくくなる心なりや(重ね重ね始末の悪い薫君の性格なのでしょうか)。 *「せ

く」は「堰く、塞く」でく堰き止める、抑え込む。 *「今」は、家に帰りついて自室で休んでいる時なのだろうが、この「今の間も恋しき」の言い回しに付いては、注に＜『源注拾遺』は「逢はざりし時いかなりし物とてかただ今の間も見ねば恋しき」（後撰集恋一、五六三、読人しらず）を指摘。＞とある。